

第32回日本静脈学会総会が

2012年6月6日（水）～7日（木）

埼玉県、大宮ソニックシティにて開催されます。

当院からは、血管外科 今井 崇裕医師が

学術発表を致しますので、ご紹介いたします。



第  
**32**  
回

# 日本静脈学会総会

## 静脈学の実践

会期 **2012年6月6日(水)~7日(木)**

会長 **佐藤 紀** (埼玉医科大学総合医療センター 血管外科)

会場 **大宮ソニックシティ** (埼玉県さいたま市)

演題募集期間

**2011年11月1日(火)~12月19日(月)**

<http://square.umin.ac.jp/jsph/>



【大会事務局】 埼玉医科大学総合医療センター 血管外科 出口 順夫  
〒350-8550 埼玉県川越市鴨田 1981  
TEL : 049-228-3400(代) FAX : 049-228-3462  
E-mail : jyo32@saitama-med.ac.jp

【運営事務局】 プランニングオフィス アクセブレイン  
〒113-0034 東京都文京区湯島 3-31-5 YUSHIMA3315ビル 3階  
TEL : 03-3839-5037 FAX : 03-3839-5035  
E-mail : jsph32@accessbrain.co.jp

「陰部静脈瘤の1手術例」  
An Operated Case of Vulval Varicose Vein

西の京病院 血管外科 今井崇裕

抄録

【はじめに】下肢静脈瘤は妊娠に伴って発症することが多く、67.5%の症例において既存の静脈瘤が複数回の妊娠・出産を繰り返す度に増悪したとの報告もある。原因として黄体ホルモンの血中濃度上昇による静脈床の拡大によって引き起こされる静脈容量の増加や腫脹した子宮による腸骨静脈の圧迫、骨盤静脈還流量増加による相対的下肢静脈還流量の減少が考えられている。非妊娠時の大腿静脈圧は約8 cmH<sub>2</sub>Oであるが、妊娠末期には20cmH<sub>2</sub>O以上に増加するといわれる。内腸骨静脈の逆流現象は、骨盤内静脈うっ滞症候群(pelvic congestion syndrome, PCS)として報告され、この中に陰部静脈瘤も含まれる。陰部静脈瘤の発症率は妊婦全体の約2%と報告されている。

【症例】39歳女性。主訴は生理時に起こる陰部の強い疼痛と左下肢の腫脹。既往歴はとくにない。出産経験は6回。初回妊娠後より左陰部周囲に静脈瘤を認めたが、出産後に改善した。その後も同様の経過を繰り返し、最後の出産からの7年経過しても静脈瘤は残存したため来院した。

【治療】静脈エコー検査と順行性静脈造影検査では外陰部静脈への逆流や拡張ははっきりしなかった。しかしながら局所所見や臨床症状から外陰部静脈瘤と判断した。治療はSFJまでの全分枝の結紮した後、大伏在静脈の選択的抜去した。

【経過】術後経過は良好で陰部周囲の静脈瘤は消失。術後は生理時の疼痛や下肢の腫脹といった症状も消失した。

【考察】今回の治療法は、外陰部静脈瘤では大伏在静脈からの分枝である副伏在静脈などと交通が見られる場合もあり局所に硬化療法を行った後に再発した、との報告もあることから選択に至った。

【結語】外陰部静脈瘤の1手術例を経験した。術前検査においては非生理時期では評価が不十分になることも予想され、非生理時期に行った検査で大きな異常を認めなかった場合においても積極的な治療も考慮すべきと思われた。